

---

# 無能と従姉妹と愉快な仲間

チキン執事

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無能と従姉妹と愉快な仲間

### 【Zコード】

Z8611Y

### 【作者名】

チキン執事

### 【あらすじ】

可愛く頭の良い従姉妹を持ち苦悩の日々を送る今では普通の高校生の眞浦晃汰。

そんな彼の周りには当たり前の様に色々なバカをやらかしていく仲間たちと共に振り回されて今日もいく。

彼の気持ちは彼女に届くのだろうか……？

( タイトル大幅変更しました！旧タイトルバカとテストと……君

と出逢えたか(5)

## 第一問 未知なる遭遇？（前書き）

いつも、最近スランプ過ぎてこんなもの書いちやいました。

要は逃避です。

ちゅう…やめて…口投げないで…すこません…

まあ、暇潰しになってくれれば幸いですね。でわ、どうぞ…

## 第一問 未知なる遭遇？

「????? S.i.d.e.」

「ねえアナタ起きて～」

ある一室。近所でも仲が良いと評判の普通の家庭の普通の家族の声が聞こえた。

その声で田代めるはその夫。名を と呼び。

その男はムクリ、と中肉中背の体を起こし、何よりも先にリビングへと足を運んだ。

「おはよ～」

男が朝一番に女性にさつ声を掛けるとその女性は料理の手を一度止め、

「おはよ～」

そう返した。

男はその挨拶を確認するとリビングのテーブルへと向かい、ある『話』を彼女にした。

「やつ言えば、『あのバカ』。アメリカから帰ってきたらしきぞ？」

そう叫びると彼女は一瞬目を見開き、

「あのバカつて……ああ。彼のことね？」

あつと昔の事を思い出したのだろう。顔が自然に微笑んでいる。

「ああ……本当に昔はバカやつたもんだなあ」

しみじみと呟く。

そう、あれからもつ、13年たつた。

不意に、壁に貼られている写真に目がいく。

そこには紫色の髪をしてカメラをもつた彼と赤髪で活発そうな男、茶髪で明るそうで、『バカ』そんな男と少し青み掛かった髪をもつ少年と一人のそつくりの『女の子』とピンク色の髪をしている彼女、ボニー・テールの髪の勝ち気な女の子、物静かそうで黒い艶やかな髪をもつ女の子、いかにもボーグ・シューといった感じの女の子がみんな仲良さげに写っていた。

男はその写真を少し遠い目をして眺めていた。

「ふふつ」

そんな彼を見たからか少し笑つて彼に近づき隣に座つた。

「やうね……。懐かしいわね。何もかもが

彼女の少し意味深な言葉。

何もかもが、懐かしい。

確かにそつなんだろ？。

何故ならあいつとの出逢いは始まりであり、過去の、終わりであった。

そう、彼らは『彼ら』と出会えたから。

チュンチュン……。

空いた窓から洩れるのは雀の鳴き声とカーテンから洩れる日光。

「う……うん。……ん」

寝返りを打ち、その日光から田を背ける様にして毛布を顔に被せた。

この春先の季節。暑い……とまではいかないが中々暖かい季節。

もうこの毛布も必要なくなるかな。と、思いつつも俺にまた眠気が襲い掛かる。

時計も見てないので何時かは知らないがそんな事はどうでもいい。

今はとにかく眠りが欲しいんだ。

そう心のなかで呴き、薄く開けていた目を、自分の欲求を満たすために再度閉じた。

しかし

そんな耳障りな高音によつて睡魔は一気に無くなつた。

.....

喜んで良いのか悲しんで良いのか。

よし、ここはポジティブに早く起きて良かったー。等と考えておこう。よくやった田舎まし時計。よく起きた俺。

しかし返つてくるのは当然沈黙だけ。まし時計の音を響かせ虚しさを煽る。その沈黙が手の中にある田覓

『晃汰ー！出来たよー！』

そんな沈黙を破るように聞こえたのは女の子の声。

別に妹や母ではない。

俺にはそんな存在は居ないから。

いや、居た。と言つべきか？

そんな事を起きたばかりの頭で考え少し苦笑する。

『ねえー晃汰ー！』

どうやら遅くなつたらしく、少し焦り混じりの声がしたから聞こえる。

「ああ、悪いーいま行くよー！」

俺はそう返し、扉をあけ階段を降りていく。

階段を降りきつて廊下を歩いていくと段々リビングからいい臭いが漂つてくる。

臭いが、強くなる。

力チャリ、と鉄製のドアノブに手をかけ引くとそこには声相応の女の子が一人。

名を、小鳥遊

たかなしすみれ  
董と書う。

補足説明をするなら俺の従姉。

俺の姉のような存在。

親よりも必要な存在。

そして俺の初めての

。

「はい、今日は昨日の余りの肉じゃがだよ。つてどしたの？私の顔じつと見つめて」

「へつー？ああー！大丈夫！いい天氣だなーー！」

「今日曇りだよ？」

「…………まあいいや。うん。頂きます」

「はーっ。えいわぞ」

董はもう食べてきたのか自分の「」飯をよそわない。

俺が「」飯を食べてるのを見つめて「」

「あの……食べにくいんだけど……」

「え？ああ！」めんね？分かつたよ。バレないように見るね？」

「す」「ふるすられた解答をありがと」

「えへへへへ」

そんな董の声に俺は箸を止めずに聞く。

「やつ言えばや」

そんな董の声に俺は箸を止めずに聞く。

ああ、肉じゃが美味しいなあ。

「今日の振り分け試験晃汰はどうぐらいくと頑つへ。」

ピタリ、と。

止まる。

いやー止まるどいひか箸を手から落とした。

チクタク……チクタク……。

嗚呼、無情に響くは秒針の音。

「晃汰……？も、もしかすると何だけど……」

何？なんて声がでない。出せない。

「もしかして　　」

だつて、

「今日が振り分け試験だつてこと、忘れてた？」

余りのやつらまつた感に声なんて出せないよ。

カツカツカツカツカツカ……。

辺りに聞こえる音は必死にペンを走らせる音のみ。

そう、回りに聞こえるのは。

シ――――ン。

一変。これは自分の机から発せられる物だ。

あれ？おかしいな。なんで俺だけこう、筆が走らないんだろ？

シャツシャツシャツシャ――――――（必死にペンを走らせる音）

いぐり問題を解こうと思つても紙に書いてしまつのは落書きばかり。

ほら、頑張ろうぜ？俺の脳みそ。  
頑張つてくれよ……。

ペンを持った腕をフルフルさせながらも頭はフル回転。しかし全部空回り。

カツカツカツカツカ……。

さらに周りのこの音が更に俺の心を焦らしていく。

く、くう……。こんななら……勉強しつけば良かつた……。

そんな事を考え頭を抱えていると、

ガシャーン――！

そんな誰かが椅子から落ちたかのような音……つて！

「だ、大丈夫か！？」

俺は焦つて立ち上がり、『その子』に声をかけた。

「だ、……大丈夫……です。……す、すみません」

彼女は顔を赤く紅潮させていて息づかいも荒い。

俺は彼女のおでこに手を当てた。

「だ、大丈夫じゃねえつて！凄い熱がある！」

「だつ……大丈夫なんです……！」

「大丈夫じゃねえつて！」

あまりに熱が高いので俺は慌てて先生を呼ぶ。

「おい、眞浦。早く席に戻れ。そうしないと無得点扱いだぞ」

先生が、やつて來た。

「なつ……。で、でもつー」

「良いから早くもどれ。姫路はもう続けられ無いらしい。無得点だ」

「…………はいわか「ふざけるなつー。…………？」

沈黙を引き裂くような怒声。

驚きながらもそちらに田を向けるとそこには一人の少年が居た。

「ひぬき吉井。それ以上騒ぐんなら貴様も無得点扱いだ

「黙るのはお前だつ！姫路さんは頑張つてゐにじつしてやつなる  
んだよ！」

「仕方がないだらつ。姫路はこんな状態だ」

「くつ……分かりました。じゃあ僕が姫路さんを保健室まで  
つれていきます」

「まで吉井！お前も無得点扱い「かつてにしてください」チツ……  
勝手にしろ！」

バタンツ！扉が閉まつてから数秒。

また、カツカツカツカツカ……と筆の走る音が聽こえてくる。

俺は周りの奇怪な目によつやく氣が付き、慌てて席に戻り、ペンを  
持つた。

。 。 。 。 。

## キーンコーンカーンコーン

結局勉強しなかった俺は、問題なんて全くと言つていいほど解けなかつた。

良くてF。普通でF。悪くてFだ。

……もうどうしようもないじゃないか。

少しだけ周りが気になり僕は董の方をチラリと横目で眺めてみると董はいつもと変わらない、ニコニコとした笑顔で背伸びをしていた。

あの様子を見てわかる。充分……とかほとんどの確率でAクラスだと思つ。

だって董はいつも笑顔で可愛いし才色兼備だし、文武両道なまさに絵に書いたような美女なんだから。

はあ……。これで離れ離れか……なんか寂しいな。

でも俺も一人立ちしないと。

そんな明日明後日辺りには折れる心意気を胸に、シャーペンを筆入れにしまつていく。

さて……帰ろうかな。

先程とは違う先生の帰りの話を聞き流し、最後の礼をして鞄を持ち、帰ろうとした。

でも、

「ちゅう……ちゅうと待つてえ——！」

そんな声が聞こえて、俺は足を止めた。

「ん？」

振り返ると、

「やあ、さつあぶつ

あのときの彼が居た。

「君は……」

「あ、僕？ あははそりゃ、名前いい忘れてたよ。僕、吉井明久  
って言うんだ」

吉井、明久。

口のなかで反芻するよつと呟く。

「あ、ああうん。で、吉井くんが俺になんか用でも……？」

なぜか分からぬが、どこか自分が自分はこの吉井に警戒をしている。

「ああ、ごめんな？ いや、ただね？」

「 お礼を言いたくて」

「 お礼…………？俺は別にそんな事を言われるよ」

「 え？ だってあの時姫路さんを助けたよ？」

姫路さん？ ああ、あの時の彼女か。

「 でもそれは吉井くんには関係無いよ」

「 うう口！」もつしながら「うう」と吉井くんは

「 あ」

と、まるで忘れていた。と「うう」のような表情をし、一拍してカラカラと笑った。

「 あはは……。なんかお礼言いたいような気分になつてたらいつの間にかそんな風に思つてたよ……はは……ごめんね」

頬を指で搔いて誤魔化すようにまた、笑つた。

「 はは……」

そんな彼を見て不思議と口から笑みが零れた。

「 ？ 何があつたの？」

突然笑つたせいか吉井君が頭の上に疑問符をつけて首を傾げていた。

「ああ、いや、悪い。……それにしても面白こな、吉井くん

そいつひと吉井は、

「明久、で良いよ? ほり、呼びにへやつだし」

吉井が一ヶ口りと笑つて俺にそいつ叫ばる。

だが

「それは嬉しい申し出なんだが……悪い、俺にはまだそんなことは出来ない。……その代わり、『吉井』って呼んで良いか?」

そう、『俺にはまだ相手の名前を呼ぶよつた興氣がない』

怖いから。

「んー……分かつたよ。んじゃあ吉井でお願い。君は……」

「眞浦晃汰だ」

俺が短くそう名乗る。

「眞浦君ね。それじゃあよろしくー。」

そんな事を言って、また笑つた。

吉井明久。

思えばこの馬鹿への第一印象は、

『馴れ馴れしい、でも良いやつ

そんなものだつた。

でも、このときからだつた。

俺が変わつていけたのは、こいつと出逢つたこの時からだつた。

そう、この日を境に俺の生活は、人生は、ガラリ。それこそ文字通り、一変した。

今までより刺激的に、今までよりバカみたいに、今までより面白可笑しく、

成つていつた。

## 第一問 未知なる遭遇？（後書き）

なんか最初つから微妙な始まり方でしたね。

まあ、皆様の寛大なお心でお許し下さいませ！

と、言うことでいつものことながら誤字脱字、矛盾点などの修正点、  
感想などを貰えると嬉しいです！

でも毒舌は程々にお願いします……。

たまに心に響くので。

第一問 恐怖！お化け屋敷！……え？教室なの？！」（前書き）

「でも……。チキン塾で」やることある。

更新が少し遅れましたね。

では、「話題」、どういへ！

## 第一問 恐怖！お化け屋敷！……え？教室なの？！」

やーいのやーいのと賑わう通学路。回りを見れば大多数の一年生がなにかを話し合っている。

まあ、それはきっとクラスの事であろう。

この学校、文月学園は一年生から振り分け試験といつものをしなければならない。

振り分け試験とは、その名の通りクラスを振り分けるものだ。

その振り分け方はAクラス～Fクラスまでの六クラスで段階分けされ、自分の点数の良さによってクラスが決まる。

聞いたことしかないが最上のAクラスは有り得ないほど設備が良いらしい。

はあ……それに比べて俺は……。

「……グスツ……鬱だ」

そんな感じで十分に一度は涙を流す俺。

「だ、だいじょうぶだつて！ほ、ほらーきつとFクラスも楽しいよ？」

隣で励ましてくれる董。

なあ……董。励ましてくれるのは嬉しいんだが全然励まされないん

だけど。むしろ純粹な好意が心に刺さつてイタイ。

三

俺が眞面目な声を出して董の名を呼ぶ。

「どうしたの？」

いやいや、大したことじやないんだけどさ」

フツと含み笑いを見せて

「人間つてどうやつたら楽に死ねるんだろうな」

「それは色々とアカエだな……」

言うと同時に身体をガクンガクンと揺らしてくる。

一  
■浦 小遊  
仲睦まじいのは結構たか邪魔たそ

## そんな、 ドスの効いた声。

見上げるより顔を上げるとそこにはいたのは顔の浅黒いスポーツマント然した巨躯の男。

「お、おはようござります……西村先生」

少し堅くなりながらも挨拶をする。何故なら彼は生活指導の鬼、西村教諭だ。ただでさえ見た目が鬼にちかいつづのに……。

「ん? 何か言つたか? 真浦

「ナニモイツテマセン」

「何故片言かは聞かないでおぐが……まあいい。ほら、受け取れ」

そう言つて渡されたのはただの封筒。

しかし、中に入っているものはこれから的一年をどう過へせるかが決まつてしまつものだ。

董は器用に紙を開けて中の物を取り出す。  
あ、Aクラス……。

「小鳥遊。代表とまではいかなかつたがあと二十点で勝つてたんだぞ。がんばつたな」

「えへへへ~そうですか?」

そうやつて他愛ない西村先生と董の会話が続いてる間も俺の苦悩は続いていた。

カリカリカリカリカリカリカリカリ……

もう……テープの部分が全くとれない。これじゃあ中が見られないぞ。

「私がやつてあげるよ」

「あ

ぱっと一瞬で取られてしまして一瞬で董が開ける。

「ははは。眞浦。お前はひさしひり小鳥遊がいなこと駄目なよつだな

はあ……恥ずかしい。」ハハハハハで見られるからやなんだよ。

「はあ……あ、あつがといへ。ほり、渡してくれ。董」

「はー」

渡しておいた紙を見るとやせつけてはまの文字。

「だよなあ……」

「まあ、そんなに嘆く」ともなじだ。向せ今年のFクラスは

と、やじまでハハハと思いやられた。とこつた感じのジヒスチャーワーを  
一回、

「Aクラスよりもよつぱり『樂して』事になるが

まあ、俺からしては歎みの種だがな。と一言ねぐ。

「樂じご事……~わねつぱり二つ……」

「自分の田で確かめる」ただな。ほり、行け。新一年生。新しいクラスが待つてゐるぞ」

そんな西村先生の言葉を聞いて柄にもなく心が弾む。

「はいーじゃあ行こつ？晃汰！」

「えつーちょっとー待てつて！」

俺の手を引いて階段をかけ上がつていった。

「なんだよ……コレ」

「あ、あはは……。私もこれほんと予想外かも……」

思わず呟いてしまったこの一言。

いや、仕方がないと思つ。

だつて……

「リクライニングシートとノートパソコンと冷蔵庫で……教材で  
もなんでもないだろ」

目の前にはホール並の広さの部屋とまるで高級ホテルの様な様々な  
設備。

いや、まで。逆に考えてみろ晃汰！

Aクラスの設備がこんないいんだ！ならFクラスも

そう考えていた時期が僕にもありました。

董とはAクラスで別れ少しの期待を持ちつつもFクラスにいつた結果。

Aクラスとは対極も対極。

最低というか人間的な生活を過ごせるかどうかも分からんボロ屋敷が目の前にあつた。

取り合えずあれだよな。

「これは酷い」

それしか意味が出てこない。

割れた窓から中を覗けばあるのは黒く腐った置み。脚の折れた卓袱台。天井に蜘蛛の巣を生産する蜘蛛たち。

そしてその中に居るのは……

「あの赤髪のやつ……どつかで……」

そこで静かになにかを考えているように鎮座している赤い短髪の男がそこには居た。

すると、田があつた。

男はチラつと田を一度こちらに向け、また卓袱台に視線を戻した。  
いや、なんかこのままだと覗き見みたいな感じだから入らないわけには行かないな。

よし。どんなに劣悪な状況でも学校生活を左右するのはやはり第一印象。いくぞっ！

意気込み少し勢い良く扉を開いた。

ら 。

ガラガラガラ……バキィ！……バタン

「ああわ、扉が……」

扉が腐つていたせいか扉が外れて落ちた。

「うと……おいしょ」

扉を持ち上げはめ直し、もう一度向き直る。

「お、おはよー!……」

きっと今の俺の顔は真っ赤なんだろ?。とても恥ずかしい。

「 よ」

後ろから聞いた男の声。

そちらに向けると、赤い短髪の男子が居た。

「 も、君は……」

「 俺は坂本雄一。このクラスの代表を勤めさせてもらひ」

そつ見た田からねえられなによつた結構まともな挨拶をされ思わず法んでしまひ。

「 あ、ああ。宜しく」

「 そんなビクビクしなくともよこな。いやつは見た田いじやアレだが根はいいやつじやぞ?」

そんな中、聞こえてきたのは結構高めのアルトボイス。

そちらに向けると、綺麗な女の子がそこにいた。

「 ええと……君は……」

「 木下秀吉じゃ」

「 ああつと。分かった。木下さんね?」

「 違ひ。」こつは『 も』じゃなくて『 君』だ。ふあああ……

あぐいをしながら代表の坂本はそう叫びる。

「うかうか…… もんじやなくて君か。………… ん？ 君？ それって…… つまり……」

「うええええ！？ 男オ！？ オイマジなのかよ坂本！ 今のが本当なら人類は大切な宝を失つたぞ！」

「うおっ。一気に口調変わったな。うんまあ。確かにこいつは男だ」  
ゼ、絶望だ。すべてを失つた。もうこじは肉の無い焼き肉の様なものだ。

「…………いや、また」

一見もう必要なさそうに見える肉の無い焼き肉。しかしそこにはまだ野菜が残つてるんだ！

野菜だつてやり方によつては色々なやり方もあるし肉の焼いた鉄板ならその味も風味として利用できる。

つまり……。

「…………案外………… それもいいのかもしれない…………」

「あつて早々」いつの位置付けと共にこいつをブタ箱にぶちこんできてやりたい気持ちが出てきたんだがどうゆづよ？」

「わしが許可する。雄一、やつてしまつがよ」

「ちよつ！待てよー挨拶もまともにしてねえのにマジで！？もう肉体言語で行つちやうの？いや、逝つちやうのー？」

「大丈夫。逝くのはお前だけだ」

「てんめえええええ！？あつ！？ひよつーマジ[冗談だつて][冗談 つて卓袱台持つなあああああー！？」

「ゴス……！」

「」のあとどうなったかは皆様の想像力にお任せする。

第一問 恐怖！お化け屋敷！……え？教室なの？（後書き）

オリ主のキャラ固定が出来ない……！

難しいですね！

さて、いつもの事ながら誤字脱字。矛盾点、改善案、感想などについてでもお待ちしています！

## 第三問 始まりの始まり（前書き）

随分遅くなつてしまい申し訳御座いません。

ともかく年内に投稿出来て良かったです。

では、どうぞ。

## 第三問 始まりの始まり

『早く座れ、このウジ虫野郎』

俺の目が覚めて初めて聞いた言葉はこれだった。

いや、初めて、と言うのは少し語弊があるかもしれない。

何故ならこれは一度目のお目覚めだから。

俺はこぶの出来た頭を抑えながら先程の罵倒を吐いたゴリラ野郎を探した。

赤い髪が目立ちやすいので、ゴリラはすぐに見つかる。

ん？ 教室の入り口辺りで誰かと話してる？

肝心の相手の顔は見えないがなんか最近聞いた声かも……。誰だっけな……。

頭のなかの曖昧な記憶を呼び起しそうと試みるが頭の痛みが邪魔で集中できない。

「お、お主起きたのかの」

目の前から聞こえてくる声にハツとなり顔をあげるとそこには木下とか言う見た目以外は普通の娘が居た。

「お主。今、『娘』と言わなかつたか？」

訂正。勘も少し常識の範囲を越えてる感じ。

「そんなはず無いだろ？木下ちゃん」

「ちやん…お主今『ちやん』と呼んでおつたな…？」

「おいおい、勘違いはよしてくれよ木下ちゃん。ほら、ジャンパーのめだか ツクスの球 川だつて男をちゃん付けしてるだつ？」

善 とか。

「つうむ。そんなもんなのか…………？」

「そんなもんそんなもん」

勘の良れわかな木下は少し厄介だな。

こいつは弁解するより流した方が早いタイプだ。

「ん、起きたのか。いい夢見れたか？」

そんな感じに現れたのは俺の意識を刈り取った張本人。坂本だ。

「ああ、今日の前で赤いゴリラと戯れてる悪夢を見ている所だよ

「んだと『ゴル』ア…？」

「やんのか『ララ』…」

お互に胸ぐらをつかみ合い睨む。

「…………チツー。」

「…………ふんつー。」

「…………こんな変態と組み合つだけ無駄だな」

「…………本当だよな。こんな赤ゴリラとふれ合つだけでも知能下がり  
そうだよ」

「…………ああああー。」

「お主らなんでそんな仲が最初から悪いのじゃ…………？」

「秀吉の言ひ通りだよー止めなよー」のバカ雄一ー。」

そんな中聞こえたのは……。

「んだとー。バカにバカつて言われたくねえよー」のバカ久ー。」

「バカつてFクラスの珍獣、ゴリラが言えんのかよ…………つて」

「あ」

思わず顔を見合わせる俺ら。

だつてそいつは 吉井だつたから。

「つてなんだお前ら。知り合いなのか?」

「いや、知り合いつて言つか……知り合つたと言つか……」

「どうだよバカじょん俺。あの時吉井は彼女を連れて保健室いつたんだからFクラスに来るのは当たり前じやないか。」

「で、でも良かつたよーほり、眞浦くんと同じクラスになれて!」

「あ、ああ。俺も嬉しいよ」

何せ他人からこんな純粹な好意を向けられることが久しぶりな俺に  
とつて、吉井の笑顔は俺にはとても苦しかった。

「えーと、ひょっと通してもらえますかね?」

不意に背後から異様に霸気がない声が聞こえてきた。

そこには寝癖のついた髪に薄いシャツを着た、いかにも冴え  
ませんオーラの吹き出たおっさんが居た。

「それと席につこひもらえますか? HRを始めますので

と、言つことはこの人は恐らく担任の先生か。

「いつちや悪いが流石はFクラス。設備も悪ければ……か。

俺はふう、とため息を吐きつつも後ろ側の席に座る。

「あ、眞浦くん!」に座るの? じゃあとなり座つていい?」

「……ああ、うん」

吉井がそうじつて俺の横に座るとそれにつれてみんな坂本達も俺の近くに腰を下ろした。

「えー、おはよひざわこます。一年F組担任の福原慎です。宜しくお願いします」

そうじつて担任の福原先生は黒板に自分の名前を書こうとしたが、やめた。

え、何? チョークすらないの? ここ学校だよな? 勉強出来ないよ?

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか? 不備があれば申し出てください」

……ふむ。

「せ、先生。あなたの田は節穴なのでしょうか? 申し出てくださいとかじやなくて申し出無くても不備しか無いんですけど……」

「それはFクラスにきた貴方のせいです」

「…………ですよね」

「…………はい。分かつてるんですよ。この負け組の巣窟に來た以上俺も等しく負け組の負け犬なんだ……」

「では皆さん、足りないもの、必要な物は極力自分で集めてきて下さい」

「　　」

皆は無言。いや、当たり前か。これで承諾しうつて方が無理だよ。

「えー、では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願こしめます」

福原先生の指名を受け、ある生徒が立ち上がった。

「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる」

お、最初は木下か。

それにして何で爺言葉? もつと『かしりへ』とか『ふふふ』とか、うむ……やべ……脳内妄想で鼻血が出そうだ……。

はあ……でも実際かなり可愛いよな。

「眞浦、お主今良からぬ事を考えたであらうへ。」

立つたままの木下が横田で此方にさしつけた。

え? 怖つ! ? 読心術でも使えるの?

「いいや? 別に何も」

俺はそつと鞄の中からラノベを出して読み始める。よし、自然な流れだ。

「またうやむやに……まあ良からぬ。以上じや。今年一年宜しく頼むぞい」

そう言つて木下が席に座ると次に立つたのはいかにも普通といつた感じの小柄な男子だつた。

まあ、

見た目だけだけどな。

この男子はなんとか知らんが至るとこからカメラやら小型マイクやらレコーダーやら使い道が明らかにおかしそうな物を持つていた。

「……土屋康太」

土屋康太という男子はそれだけを言つと席に着いた。

何だが絡みにくそうな感じだなあ……。いや、そこまで絡みたいと思えないが。

それにしてもこのクラス何だが濃いな。俺みたいなキャラの薄いのが居ても大丈夫なのだろうか？

「……です。海外育ちで、日本語は会話できますが、読み書きは苦手です」

お、珍しく女子。このクラス見たところの男子しか居ないからなあ。

「あ、でも英語は苦手です。ドイツ育ちなので。趣味は」

ふんふん。  
趣味は？

「趣味は吉井明久を殴ることです」

はえ？

ガタソッ。と隣の吉井が大きく後ずさるのを横目で確認した。

卷之三

羨ましいなあ～こんな綺麗な子に殴られて。嫉妬し……ちやわねえ

何言ってんたよ

俺は哀れそうな感じので吉井を見るが吉井は吉井で冷や汗を垂らしながら必死に目を逸らしていた。

「はりせりー」

彼女はそう言い俺の横の吉井に手を振る。チッ。リア充が。

「…………。」、島田さん

「吉井、今年も宜しくね」

島田、といつやつの自己紹介が終わり、それから他のやつの自己紹介が淡々とされていった。

そしてついに俺の横の吉井が立ち、自己紹介を始めた。

吉井は大きく息を吸いこみ、言つた。

「 ハホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね 」

『ダアアーリイイーン！……』

むさ苦しく野太い多数の声。聞いてるだけでも吐き氣を催す。

「 失礼。忘れてください。とにかくヨロシクお願ひします」

吉井は苦笑いを浮かべ何とか誤魔化しているが、実際顔が真っ青。足震えてるし。

つて次俺かよ。よし、じゃあ俺は少しまともに行こ。

「ええと。はい。俺の名前は眞浦晃汰です。好きなものはラノベ全般とカラオケとか軽くファッショニ系とか。嫌いなものは人を『物の様にしか扱わないやつ』や、『人の価値を血統や才能でしか見えない汚物』です。まさこのうもへつたくれもないこのクラスでは仲良くできると思うので宜しく」

ちょっと喧嘩を売るような事を言つてしまつたためか、周りの奴がこちらに何か言つてくる。

『才能がないだつて！？ふざけるな聖典（エロ本）を読みに読みまくつた俺はあれだぞ！布越しでも分かるんだぞ！？』

『ハツ（嘲笑）そんな程度か。駄目だなあ全く。俺なんて湯煙が全

身を覆つてたつて出来るぜ?』

『なんだよ、その程度か。俺なんてバスタオルが全身を覆つてたつてわかるぜ』

『『……なん……だと……!』』

馬鹿ばつかり。助けて。

そんな当たり前じやない光景に溜め息をついて席に座る。

そして俺が席についた瞬間扉が勢いよく開き、扉の向こうから女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えつ?』

何故か皆が驚いたような声をあげ、ざわつき始める。

「一度良かつたです。今自己紹介をしてる所だったので、姫路さんもよろしくお願ひします」

先生がそう催促するとピンク色の髪をもつた彼女が肩で息をしながらこちらを向いた。

「は、はいーあの、姫路瑞希と聞こます。よろしくお願いします。」

『…』

なんか見た感じ頭良さそうだけだ。

あのとき倒れてなかつたらクラス何だつたんだ。

しかもかなり可愛いし。なんと言つか……保護欲を……。

俺がひとつでに解説をしてると一人のFクラス男子が、

「はいっー質問ですー！」

と、勢いよく手をあげた。

「あ、は、はいっ。何ですか？」

「どうして姫路さんがここにいるんですか？」

そんな質問に首をかしげる。

俺は吉井の肩を叩き吉井を呼ぶ。

（……なあ吉井。姫路ってなんなんだ？）

俺がそう聞くと吉井は信じられない。といった顔をして

（……えつー？嘘でしょ？姫路さんだよ。知らない？頭がよくて可愛いし愛想もいいから皆に人気なんだつてさ）

（……へえ。通りで）

彼女には何かしらオーラみたいなものを感じた。

それこそ、『あいつら』が持つてたような天才的なオーラを。でもなんか違うんだよな……根本的な感じが。

そんな事を考えていたら姫路が口元をつむぎに向いていた。

多分だけ言ひ出しずらこのだろ？。

「『や』の姫路さんは熱だしけりやつたせいで途中で試験を止めりやつたんだよ」

「ちよつとー眞浦くん！？」

「んでそれを吉井が王子様の如く颯爽と現れて姫路を助けてたな。いやー。あのときの吉井はかつこよかつたなあー！」

「え？ そ、そりへ？」

ちよつと吉井は顔を綻ばせ頬を搔く。

「え……えつー？ よ、吉井君ー？」

今まで沈んでいたはずの姫路が急に口を開いて吉井の名を呼び始めた。

この驚き方は……。

「すまん。吉井。お前のフラグは今折れた……」

「だな。姫路、明久が不細工なのは解つてゐるから一田落ち着け」

「ちょっと待つてよ一人共！酷くない！？特に雄一！…それでも友達か！？」

「「……は？」

「あ、なんか御免なさい。だからやめてその『何言ってんの』につ見たいな用。かなりきつい……」

「しかし坂本。吉井はそこまでブサイクではないぞ。そこまで」

「それ遠回しに僕のこと軽くブサイクって言つてない？」

「いいえ…吉井君はブサイクじゃ無いですよー顔のワインが細くて綺麗だし……あ

言い切る前に自分の言動を思い返したのか恥ずかしそうにしつむき「終わりました！」と囁みながら挨拶をして、吉井の後ろに座った。

「ふむ……そう言わると確かに見てくれば悪くない気がする。確か俺の知り合いにもお前のことが好きなやつがいたような気がするし」

「おお、良かつたじゃないか。知り合いながらこれは知つておきたい情報。

「え？ それは誰

「そ、それって誰ですかっ！？」

吉井の言葉が姫路の声によつて遮られる。

何だ。姫路も普通の女の方。いついつ尊には敏感だよな。

「確か久保 」

久保さん……か。ああ、なんか知性的な名前だなあ……。俺もそつ  
いうイロモノのフラグ建てたいなあ。

「 利光だつたかな」

久保利光（ ）

前言撤回をします。

どうなつてんだよ。イロモノにも程があるだろ。どんなルート開拓  
してんのこいつ？

「.....」

「 吉井、声を殺してわざわざ泣くな……」

さすがの俺も哀れすぎていじる氣にならんのに坂本、こいつは悪魔  
か。

「まあ冗談だ。安心しろ 半分は」

「 最後の不吉な五文字はなにー?」

「ところで姫路。風邪は治ったのか？」

「あ、はい。もつすつかり平氣です」

「ねえ雄二！ やつきの半分ってなにさーー！」

「おいおい吉井。声がでかいぞ。そんな声だしてたら」

「はいはい、そこの人たち。静かにしてくださいね」

と、パンパンと出席簿で机を叩き、静かにしてようと伝えてきた。

「まじ言わんこつちや」

「バキイツ！ バラバラバラ……」

突如、軽く叩いただけの教卓がごみ屑と化した。

おかしい。なんで出席簿>教卓なの？普通逆だろ。

流石に息を飲まざる終えない。

これがFクラスって事なのか……！

「えー……。少し、静かにして待つて下さい。替えを用意してきます」

福原先生は早くも疲れた笑みを顔に浮かべ軽快、とは言えない動きでFクラスを後にした。

「あは……ははは……」

斜め後ろの姫路は苦笑いをしていた。

「雄一、ちょっといい?」

と。

吉井の先程のような抜けた声ではなく、少し真剣味を帯びた声が聞こえた。

「なんだ?」

我がFクラス代表はあぐびを噛み殺して吉井の方を横田で見る。

俺も釣られてそちらを見るとそこにいたのはあのへラへラしたいつもの吉井ではなく、キリッと、何かを決意したようなそんな顔だった。

「ちょっと、ね。話があるんだ」

吉井は少しだけ姫路の方を見て、坂本を連れ廊下に出ていった。

……なんなんだらうな。

俺は坂本のが移ったのか、欠伸を噛み殺し、生徒の自己紹介をBGMに読みかけのラノベを読むことに専念した。

「こんな当たり前が、続くと思いながら。

## 第三問 始まりの始まり（後書き）

次当たりに雄一の宣言ですね。

ええと。皆様にお願いが。

オリキャラなどがこれだけじゃ心もと無いので読者様に出したいオリキャラなどがありましたら是非書いてください。この小説に出てさせてください。

決して、無理強いではありませんので、まあ？こんな駄目作品でも俺のキャラ載せてやるかな。みたいな感じで構いません。お願ひします。

#### 第四問 設備を変えたいか？ならばクリークだ！（前書き）

今回は中々書きました。

これからが試験用喰戦争です。

#### 第四問 設備を変えたいか？ならばクリークだ！

はあ……本当に面倒臭い事になった。

目の前に広がる光景は、まるで戻たり前ではなかつた。

「行けえーー！ロクラスはすぐそこだあーー！」

須川が声を張り上げ指示を出す。

『おおーーーー！』

皆はそれに答えるようにロクラス生徒に向かつて次々と何かを呼び出していく。

そして、そこには武器を持った、小さなそれらが居て……はあ、普通じゃない。

廊下には生徒と教師。

『何か』と『ソレ』。

当たり前の様に怒声やら罵倒やら爆音が飛び交ひこの空間は、いつの間にかもうそこは……。

もつもつ、『戦場』だった。

「では、自己紹介の続きをお願ひします」

またボロい教卓を抱え戻ってきた福原先生は坂本と吉井が何か言い争いをしながら同時に教室に入ってきたのを見つから言葉を続けた。

姫路が……何だって？

「えー、須川亮です。趣味は 」

福原先生の言葉によつてまた淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

福原先生に呼ばれて坂本が席から立ち、ゆっくりと教壇に歩み寄る姿にはふざけた雰囲気は一切見られず、その姿は正にだいひょうだった。

「坂本君は「クラスの代表でしたよね？」

福原先生に問われ、鷹揚に頷く坂本。

てかこのクラスじゃ代表でも嬉しくないだろ。なに少し自慢げなんだよ。どちらかと言うと恥にちかくね？

それにも関わらず坂本は自慢に満ち溢れた表情で教壇に上がり、俺らの方に向き直った。

「Fクラス代表、坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

こんなバカ溜まりの中で代表なんて慕ってくれるやつはまずいるのか不安。その前にクラスの奴等にはとにかく不安要素しかない。

だってそうだろ。なにあの黒いやつら。ちょっと西洋の歴史で見たことあるんですけど。

坂本をもう一度見ると坂本は皆が静かになるのを待っているかの様に、目を鋭く細め目を一瞥した。

流石に皆を空氣を読み、一度遊ぶ手を止め、意識がそちらに向かう。

坂本はそれを見て満足気に頷き、

「さて、皆に聞きたい」

坂本が、Fクラスの至る箇所に目を向けていく。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて、皆がそれらの設備を眺める。

「Aクラスは冷暖房完全設備な上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸置いて、静かに告げる。

「不満はないか？」

『大ありじゃあつー』

二年Fクラスの、魂が響いた。

「どうう？俺だつてこのじょうきょうは大いに不満だ。代表として問題意識を抱えている」

『そりだそりだー！』

『いくら学費が安いからつてこれは酷すぎるー改善を要求するー』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？余りに差が大きすぎる』

堰を切つたかのように次々と溢れ出すFクラスの不満。

「昔の人は言つた。『働くがざる者食つべからず』とな。俺もその意見に至極同意する。だから、Fクラス諸君。俺達も『働いて獲よう』じゃないか」

こいつの言わんとする事の意味が、解る。分かつてしまつ。

そして喉が、一瞬にして乾いていく。

まさか……まさか……いつが言つてる事つて……。

「お、おい坂本、まさかお前……」

「ああそりだ眞浦。これは俺からの提案だが

そこで、奴は本性を現した。

今までの様にクールにではなく口許には獰猛な笑み。

今までの様に冷静な視線は田には無く、代わりにあるのは燃えるよう赤く、意思の強い瞳だけ。

のちの、全ての発端となる全ての原点が、ここで始まる。

『監。『試験召喚戦争』をやつてみないか?』

Fクラス代表、坂本雄一は戦争の引き金を引いた。

突然だが、ここで説明を。

AクラスとFクラス。

この意味はどういったものか。

それは、

エリートと……クズだ。

それはすべてに置いて、だ。

どちらが強い？なんて聞かれたら百人が百人でAクラスと言うだろう。

そしてその事実が何を指すか、それは。

『勝てるわけがない』

諦め。

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

諦め。

『姫路さんがいたらなにも要らない』

.....。

ま、まあとにかくその一言は、誰もが諦めてしまつよつた無理のものだつた。

しかし、だ。

文丘学園のテスト点数には、際限が無い。

ただ、一時間問題を次々と解いていくだけ。

つまり、頭の良い者なら五点以上の高得点を叩き出せる。

そして裏を返せば、頭の悪い奴はあまり良い点数を出せない、だ。

だが坂本の提案した『試験召喚戦争』はそれだけでは決まらない。

これは、戦争なのだ。

戦い争つ、それが『戦争』だ。

これが何を意味するかと言つとい、

戦わせるのだと、『召喚獣』を。

これが大体の『試験召喚戦争』の全容。

まずはテストで点数を取り、それが自分が戦う為のポイントとなり、それを削りあつて戦うのだ。召喚獣を使って。

戦つて負けると『戦死』なるものがあるらしいがいかんせんまだや

つたことがないので分からぬ。

確かに他にも色々と細かいルールがあるのだが、覚えてない。ま、生徒手帳見れば良いし。

とにかくだ。この説明を見るに、確実に負けるわけではないが、殆んどと言つて良いほど勝てる確率は低い。当然それに挑もうとするバカもいないしクラス中は諦めて満ち溢れていた。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

そんな圧倒的戦力差を知りながら、坂本はそう宣言する。

『何をバカなことを』

『できるわけ無いだろ』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な発言が教室を包む。

まあ実際俺も今のところやりたいとは思えない。何せAクラスとFクラスだ。こちらで何をやるかとあっちからしたらたんなるちょこざいな真似でしかないだろ。

「根拠なら、あるぞ。それを今から説明してやる。……康太、畠に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

視線が俺へと集まる。

……え？ おい坂本。止めてくれよ、なんかかなりイタイポジションじゃないか。

すると姫路の後ろの席の誰かがビクンッ！と跳ね起きる。

目をやるとそこには、土屋康太が……ってまさか……！

「……………（ブンブン）」

「は、はわつ」

必死になつて首がもげるんじゃないかと思えるほど高速に首と手を振つて否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子。

彼は今、頬に畳の跡を残したまま壇上に上がろうとしています。

「土屋康太。」こいつがあの有名な、寡黙なる性<sup>ムツヅリー</sup>識者だ」

「……………（ブンブン）」

土屋、と名乗られた男子がわいつと同じ否定のポーズを取るにも関わらず、教室中は諦めで一気にざわつく。

無論、俺も内心驚いた。

土屋康太、と言われてもスルーしてしまうが、ムツヅリーーと来れば話は別、その名前は男子生徒からは恐怖と畏敬を、女子生徒からは軽蔑を以つて挙げられる。

『ムツヅリーーだと……？』

『馬鹿な、奴がそつだと語りうのか、……？』

『だが見る。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そつとしているぞ……』

『ああ……ムツツリの名に恥じない姿だ……』

うん、いくらやうやつて言おうと見た目は結構悲しいぞ？頬っぺたに置の跡 + 覗きの疑いつて。

「姫路の事は説明する必要な無いな。皆だつてその力は良く知つてるはずだ」

「ええつ！？わ、私ですか？？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待してる」

確かに、対Aクラスとしては唯一のまともな戦力だろう。

『そつだ。俺達には姫路さんが居るんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいればなにもいらないな』

……そろそろ突っ込んで良いのかな？

「木下秀吉だつている」

木下秀吉。木下ちゃんの事だろ？。てかなんかすごいの？木下は。

『おお…………！』

『ああ。確かに木下優子の……』

木下優子？なんか聞いたことある……様な気が。

「当然、俺も全力を尽くす

『確かに何だかんだでやつてくれそっだな』

『坂本って確かに小学生の時神童とか呼ばれてなかつたか？』

『それじゃあ振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だつたわけか』

『実力はAクラスレベルが一人も居るつてことだよな！』

そこにはもう先程のような雰囲気は無い。それどころか坂本。こいつは本当にすごいのかもしない。

相手がバカだからかもしれないが一瞬でクラスメイト達の気持ちを集め、集結させ始めてる。食えん奴だ。

行けそうだ、やれそうだ。Fクラスの奴らは日々にそういうい始め、空気はもう最高潮一歩前位だ。

そして、そのテンションは 。

「それに、吉井明久だつている

…………シン。

一気に落ちる。

「ちよつと雄二ーー。ひつひつたる。僕の名前を呼ぶのをーー全くそんな必要はないよなー。」

「よ、吉井。ブフッ……。わ、きっとなんか有るんだよ……。フフフ……は、腹いてえ」

「フォローしてくれるのは嬉しいけどせめて笑うの止めてからにしてよ。眞浦君ー。」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないだ』

「ホラ、折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるしー。僕は雄二と違つて普通なんだから って何で僕を睨むのをー。僕は悪くないよー?』

「まあ与太話はここまでにして実際吉井ってなんかすいの?怒つたら強くなるとか

「なにその設定。 ううん。別に僕は特別なものとかないよ。普通だし

「そりゃ、眞浦は知らないのか。なら教えてやる。」この肩書きは『観察処分者』だ

ジト田で吉井を見てみる。あ、田逸らしやがった。

観察処分者つてさ、確か。

『バカの代名詞じゃなかつたつけ?』

クラスの誰かが、俺と同じことを口にする。

「ち、違つよつーちよつとお茶田な16歳に付けられる愛称で」

「そりゃ、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄一!」

観察処分者つてさ、確か勉強ダメダメ。意欲も見られなく、学校の中で問題しか起らわないようなまさにダメ人間に課せられる感じだつたはず。

「あ、あの、それってどういうものなんですか?」

姫路が首をかしげる。

「具体的には教師の雑用だな。力仕事とか類いの雑用を、特例として物に触れるようになつた試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来は、召喚獣は物に触れられない。言つてしまえば幽霊見たいな

物。床には特殊な処理が施されてるらしいから立てるらしい。

「そりなんですか？それってすごいですね。試験召喚獣って見た目より力持ちって聞きましたから、そんなことが出来るなら便利ですね」

確かに、と俺も頷く。

「いやいや、実はそんな大したものじゃ無いよ。」

しかし、何故か吉井は否定の意を取る。

『おいおい、観察処分者ってことは、試験召喚獣がやられたら本人も苦しいってことじやないのか？』

と、俺が丁度疑問になっていたところをクラスの誰かが言つてくれる。

「やうなの？吉井

召喚獣がやられたら本人も苦しい。なんか不思議な絵になりそうだな。

「うん、ファードバックつていつて何割か返つてくるんだよ。疲れとか痛みとか。だから雄二つ！僕の働きは期待しないでねつ」

そんな胸をはつて言つよつた事じやねえだろ。

「大丈夫だ明久。お前はいてもいなくても変わらないからな」

流石は坂本。吉井の心抉るの上手いな。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはロクラスを征服してみようと思う」「うう

『Dクラスか！』

『なんかやれそうだな!』

『ああ、Dクラスなら勝てそうだ!』

## クラスの面々から上がる声。

『当然だ！』

「なら何を望む！俺達が這い上がるために！何を望む！」

ちょっと待て。このネタは酷いぞ。

「宜しい！ならばクリークだ！」

言つたああ！こいつ言いやがつたよ！俺が言いたい名言ベストファイブを言いやがつた！

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！」

『そりだー』

坂本は顎を静めるように手を上げる。

「諸君……システムデスクを、取りに行くぞ……！」

『ウオオオオオオオー！』

「お、おお……」

「お、おー……」

姫路と俺が、上がりきらないテンションのせいで声が小さくなる。  
だってそりじゃん。結構これ恥ずかしいよ？

「と、言つわけだ明久。お前にはロクラスふの宣戦布告を命じる  
……下位勢力からの宣戦布告って大抵ひどい目に遭つよね？」  
「大丈夫だ。俺はお前に嘘をついたことは無い。騙されたと思つて  
いつてみろ」

坂本が優しい目で吉井を諭す。

「……フツ。仕方ないなあ。分かつた、僕がいくよ

「ああ頼んだ。お前以上に適任は居ないんだ」

その言葉を最後に、吉井はロクラスに向かって歩き始めた。後ろ姿

がやけに格好いいぞ。

こうして、俺達の戦いの火蓋は切つて落とされた。

第四問 設備を変えたいか？ならばクリークだ！（後書き）

誤字脱字、感想など宜しくお願いします！

これからも、宜しくお願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8611y/>

---

無能と従姉妹と愉快な仲間

2012年1月4日12時49分発行